

群馬が生んだ大歌人

つち ぶ ん
土 屋 文 明

って



どんな人?



群馬県立土屋文明記念文学館

Gunma Prefectural Museum of Literature
in Commemoration of Bunmei Tsuchiya

はじめに

群馬県出身の土屋文明（以下、親しみを込め、原則として「文明」と言います。）は、明治、大正、昭和、平成の四つの時代を生き、短歌の分野で、文化の発展に他に比べることができないくらい大きな功績を残し、文化勲章を受章しました。

文化勲章は、昭和 12（1937）年から始まり、文化関係では、日本で最高の名誉とされています。短歌関係で受章したのは、文明をふくめ、4 人だけです。また、旧制中学校まで群馬県で過ごして受章したのは、洋画家の福沢一郎と文明の 2 人だけ



文化勲章 当館所蔵

です。ともに群馬県の名誉県民になっています。さらに、文明は、群馬県を出てから長く暮らした東京都でも高く評価され、名誉都民にもなっています。

文明は、明治 23（1890）年に生まれ、平成 2（1990）年に亡くなるまで百年の人生を送りました。その人生には、苦労や困難がたくさんありましたが、出会う人に恵まれ、努力を惜しまず、強い意思をもって生き抜くことで大きな功績を残すことができました。

この冊子は、群馬から育ち、日本の文化に大きく貢献した土屋文明という偉大な歌人について、たくさんの皆様に知っていただき、親しみを持っていただくことを目的に作成しました。

目次

はじめに	P 1
① 偉大な功績	P 2 ～ 3
② 百年の人生	P 4 ～ 9
③ 文明の短歌	P10 ～ 13
④ 記念文学館	P14

① 偉大な功績

—太平洋戦争後の危機から短歌を救う—

短歌は、日本でたいへん古くから作られてきた文学で、明治時代以前は、和歌と言われていました。現存する最古の和歌集と言われている『万葉集』には、1300年以上も昔の和歌が載^のっています。そして、短歌は、今でも多くの新聞や雑誌が短歌欄^{らん}をもっているように、たくさんの人が作ったり読んだりしています。

明治時代以降、短歌には2回の危機がありました。

最初の危機は明治維新後まもなくの時期です。

西洋の文化が流入し、世の中が大きく変わるなかで、従来のしきたりにしたがい、現実を離れて花鳥風月の風流な世界をよむ趣味的な和歌では、存続が難しくなりました。そのときに、「写生」を唱え、「和歌」を「短歌」に刷新することで、その伝統を守り、発展させたのが正岡子規^{まさおか しき}です。

子規の教えを受け継ぎ、短歌の世界でたいへん権威のあった雑誌が『アララギ』です。文明は、その『アララギ』の代表である編集発行人を昭和5（1930）年から22年間務めました。つまり、文明は、長い間、短歌の世界の中心的な指導者でした。

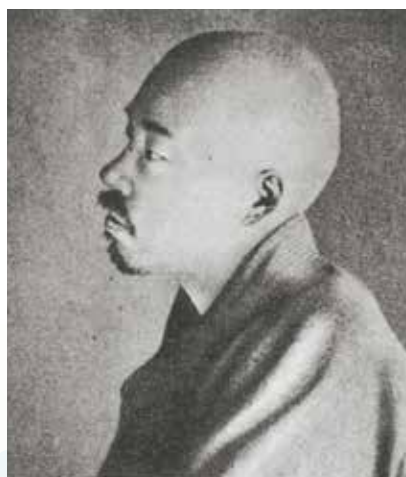
さて、もうひとつの危機は、太平洋戦争の敗戦により、日本の伝統的な制度や文化が大きく見直された戦後まもない時期です。

文学の世界においても、昭和 21（1946）年から昭和 22（1947）年にかけて、「第二芸術論」と言われる、俳句や短歌を軽視する主張がさかんに行われました。そのような動きに対して、文明は、「短歌は生活そのもの」であり、現実の生活から生まれるその作品は、新しい民主主義の時代の文学として十分に価値があると主張し、自らも率先してそのような短歌を作るとともに、全国を回り、短歌にかかわる人たちを励まして、短歌の伝統を守り、発展させました。

現在も、短歌は、日本の文化として多くの人たちに愛され、大切にされていますが、文明が果たした役割はかけがえのないものでした。つまり、土屋文明は、正岡子規とともに短歌の世界における偉大な功労者なのです。



土屋文明



正岡子規

出典：国立国会図書館「近代日本人の肖像」

② 百年の人生

はるなさん
—榛名山を望みながら少年時代を過ごす—

土屋文明は、明治23（1890）年9月18日、榛名山を望む群馬県西群馬郡上郊村大字保渡田（現在の高崎市保渡田町）に生まれました。



榛名山

明治23年は、前年に発布された大日本帝国憲法が施行され、第1回帝国議会が開かれた年で、日本が近代国家としての形を整えた頃でした。

土屋家は、父が生糸や繭まゆの商売をし、家族が小規模の農業をして、忙しく暮らしていました。

弟が生まれた3歳のころから、文明は、近くに住んでいて子どものいない伯母の家で暮らすことが多くなりました。伯母の夫である伯父は、文明をたいへんかわいがり、しばしば本を読んでくれました。話に感動すると、文明は涙を流したそうです。

明治30（1897）年、地元の小学校に入学した文明は、豊かな自然のなかでのんびり過ごしながらも、伯父やさまざまな先生の影響で少しずつ文学への興味を広げていきました。

明治37（1904）年、文明は、尋常科4年を終えて高等科3年の時に、県立高崎中学校（現在の県立高崎高等学校）の入学試験を受けて合格し、進学しました。当初、文明の父は、

文明の進路について、4年制の高等科を卒業させ、その後は商店に奉公に出そうと考えていましたが、自分の商売がうまくいっていたことや、成績優秀な文明の進学を小学校の担任の先生が強くすすめたことから、中学校に進学させました。

中学校時代の文明は、その上の学校に進学する見込みはなかったので、学校の勉強よりも、俳句や短歌を作って学校の雑誌や専門の雑誌に投稿したり、『万葉集』の注釈書を読んだりして過ごしました。

明治40（1907）年、文明が4年生の時に、村上成之^{しげゆき}という先生が千葉県の中学校から転任してきました。村上先生は、俳句や短歌を作り、文明が投稿している専門誌にも作品を投稿していました。また、短歌の有力者である伊藤^{さちお}左千夫とも親しくしていました。文明は、すぐに村上先生を強く慕い、個人的に文学の教えるようになるようになりました。



高崎中学校卒業写真
出典：高崎中学校校友会誌『群馬』第15号

一 恩師伊藤左千夫のもとへ上京する一

明治42（1909）年、高崎中学校を卒業した文明は、文学への思いをおさえることができず、村上先生の仲介で、東京で牧場を経営しながら、正岡子規の伝統を受け継ぎ短歌誌『アラギ』の中心として活動していた、左千夫のもとへ上京しました。左千夫は、上京の翌日さっそく、文明を歌会に連れていき、アラギの主な歌人たちに紹介してくれました。そ

のなかには、やがてともに短歌の世界を担うことになる斎藤^{もきち}茂吉もいて、文明の上京をたいへん喜んでくれました。こうして、文明の「アララギの歌人」としての人生が始まりました。



明治 42 年頃 伊藤左千夫宅にて
(前列左が左千夫、
後列左端が斎藤茂吉、右端が文明)

文明自身は、牧場で働きながら文学を勉強したいと考えていましたが、文明に日本の文学を背負っていく豊かな才能があることをすばやく見抜いた左千夫は、学費を援助してくれる人を見つけた上で、文明を第一高等学校に進学させました。高等学校卒業後は、東京帝国大学（現在の東京大学）に進学し、最も高いレベルの学問、文化に接し、文学者として活躍する基礎を築くとともに、^{あくたがわりゅうのすけ}芥川龍之介をはじめ、文学をころぞす多くの仲間をめぐり会いました。

土屋家は、農村の平凡な家庭だったので、家からの仕送りはわずかでした。そのため、学費の支援を受けても、文明の学生生活は、さまざまなアルバイトをしながら生活費を節約しなければならなかったたいへん厳しいものでした。

—29 歳で全国最年少の校長に就任する—

大正 5（1916）年に帝国大学を卒業した文明は、私立の中学校に勤め、翌年『アララギ』の選者になりますが、収入は十分ではありませんでした。そのとき、先輩歌人^{しまき}の島本^{あかひこ}赤彦が長野県諏訪^{すわ}高等女学校の教頭の職を紹介してくれまし

た。大正7（1918）年3月、文明は、以前から交際していた同郷の塚越テル子と結婚し、いっしょに諏訪へ赴任しました。諏訪はいたる所に温泉がわく土地柄で、文明夫妻も温泉つきの家を借りて暮らしました。

諏訪高等女学校は、新しい学校で、教員は活発で意欲に満ち、地元の人も素朴で誠実でした。大正9（1920）年1月、29歳で校長



諏訪高等女学校校長時代
（後列右から2人目が文明）

に昇任した文明は、校長としては全国最年少で、従来軽視されていた英語や数学の勉強を重視するとともに、服装や時間の使い方などの生活面も厳しく指導し、たくましく生きていける女性を育てることを目指しました。文明の教育は、周囲の人々に受け入れられ、成果を上げていきました。

大正11（1922）年4月、文明は、諏訪高等女学校での指導力を評価され、松本高等女学校の校長に転任します。松本は、長野県経済の中心地で、いろいろな立場の人がいましたが、文明は、短歌をやめて教育に全力をそそぎ、自分の考えを貫きました。文明の、慣習にとらわれない教育に好感をもつ人はたくさんいましたが、反感をもつ人も少なからずいて、新聞にも取り上げられるようになりました。

そのようななかで、大正13（1924）年4月、県は、文明に木曽中学校校長への転任辞令を発しましたが、文明は、信念を曲げず転任を拒否して辞職し、長野県を去りました。

—『アララギ』の代表となる—

東京へもどった文明は、大正 14（1925）年 2 月、最初の歌集『ふゆくさ』を発表し、高い評価を受けました。この後、文明は、法政大学、明治大学などで教えながら、『アララギ』を中心に、歌人としての人生を送ります。



『アララギ』
25 周年記念号表紙

昭和 3（1928）年には、東京都の青山南町（現在の港区南青山）に転居します。以後は、戦争で疎開した期間を除き、そこで人生を送りました。

昭和 5（1930）年には、『アララギ』の代表である編集発行人になり、22 年間務めました。

また、短歌の活動のかたわら、その活動の基礎となるように、『万葉集』を研究し、『万葉集年表』、『万葉集私注』^{しちゅう}などを発表し、『万葉集』の研究者としても活躍しました。

昭和 19（1944）年には、激しい戦争が続くなかで、陸軍省の囑託^{しよくたく}として約半年間中国を旅し、当時の一般的な考え方とは異なり、中国の人々や文化を尊敬する短歌を発表しました。

—短歌の伝統を守り、発展させる—

昭和 20（1945）年 5 月、空襲で自宅が焼けたため、群馬県^{あがつま}吾妻郡^{かわど}原町川戸（現在の吾妻郡東吾妻町川戸）に疎開し、昭和 26（1951）年までそこで暮らしました。8 月に太平洋戦争が終結すると、物資が不足し、他の歌人たちと連絡をとるのもむずかしい状況にもかかわらず、中断していた『アラ

ラギ』をすばやく復刊し、昭和20年9月号を出版しました。

また、敗戦で日本の伝統文化が否定されるなかで、俳句や短歌を軽視する「第二芸術論」もさけられましたが、文明は、それを理論的に強く否定するとともに、戦後の新しい文化の中でも高く評価される短歌を率先して作りました。



川戸の畑を耕す文明

文明がその生涯で発表した歌集は13冊、作った歌の数は1万2千首を超えます。また、新聞や雑誌の短歌欄の選者を務めたり、全国各地で開かれる歌会に精力的に参加したりして、たくさんの歌人や短歌を愛する人たちを指導しつづけました。

—文化勲章を受章する—

昭和61(1986)年、文明は、短歌の世界での長年にわたる功績が高く評価され、文化勲章を受けました。



昭和61年11月 文化勲章受章

文明は百歳まで長生きし、そのこと自体はめでたいことですが、その反面、長男や妻をはじめ、たくさんの人に先立たれ、たくさんの悲しみを味わい、たくさんの死をいたむ短歌も作らざるをえませんでした。

平成2(1990)年12月8日、文明は、短歌の世界における偉大な功績を残して、亡くなりました。近親者が最後に聞いた言葉は、人間味あふれる文明らしく、「死にたくない」だったと言われています。

③ 文明の短歌

—短歌は生活そのもの—

文明は、正岡子規が重視した「写生」という考え方を大切にして短歌を作りました。

「写生」とは、美しいとか、うれしいとか、自分の心情を表すような言葉を安易に使わないで、事物や情景を客観的に写し取るなかに自分の心情を表現する、という作り方です。

また、文明は、「短歌は生活そのもの」と述べ、従来の人々があまり取り上げなかった題材も取り上げて、現実の生活を直視した短歌を作りました。

さらに、短歌の定型である「五七五七七」の音数を大切にしながらも、増やしたり減らしたりする方が効果的である時には、部分的に定型から外れる「破調」^{はちよう}の短歌も作りました。

文明が、その生涯において作った短歌はさまざまですが、

- ・ 感受性豊かな青春時代の短歌
 - ・ 若くして離れた故郷を思う短歌
 - ・ 近代文明の非情を鋭く見つめた短歌
 - ・ 太平洋戦争中の旅で中国文明の偉大さに感動した短歌
 - ・ 植物をはじめ自然を繊細に観察した短歌
 - ・ 肉親や知人の死を悲しんだ短歌
- などに分けることができます。

それぞれの代表的な短歌を紹介します。

19歳の頃の作品で、第1歌集『ふゆくさ』の最初に載っている短歌です。

3日間毎朝美しく咲いていた睡蓮の花も今朝はもう咲かない。はかない花の命がよまれています。



この三朝^{みあさ}あさなあさなをよそほひし
睡蓮^{すゐれん}の花今朝^{はなけさ}はひらかず

青き上に榛名をとほのまぼろしに
出でて帰らぬ我のみにあらじ



土屋文明記念文学館のある公園内の榛名山を望む小高い所に歌碑があります。

青い草木の上にそびえる榛名山はいつも私の心の中にあり、なつかしいが、故郷

には帰る家もない。しかし、私と同じような立場の人はたくさんいる。

自分だけでなく、近代の社会になって増えた、故郷を離れて暮らす人々の悲しみも大きくよみこんだ短歌です。



嵐の如く機械うなれる工場地帯
入り来て人間の影だにも見ず

昭和初期の京浜工業地帯の様子をよんだ短歌です。^{あらし}
工業地帯のあたり一面に、機械の作動する音が嵐のように鳴り響いているが、人間の姿はまったく感じられない。

このような情景は、それまでは短歌によまれることはありませんでした。現実世界を直視した文明の短歌の特徴であり、このような短歌をよんできた文明だからこそ、「第二芸術論」に反論することができたのだと思います。

垢づける面にかがやく目の光
民族の聡明^{そうめい}を少年に見る

文明は、太平洋戦争末期の昭和19(1944)年に、中国各地を訪れました。

顔は垢^{あか}で汚れているが、生き生きと輝く少年の目を見ると中国の人々が聡明であることが分かる。当時、中国を見下す日本人が多かったなかで、文明は中国を尊敬していました。



橙の年を越えたる一つ実を
囲む青実も色づきそめつ



^{だいたい}
橙の木には昨年できた黄色い実が一つそのままなっている。その実を囲んで今年できた青い実もだんだん黄色く色づきはじめている。

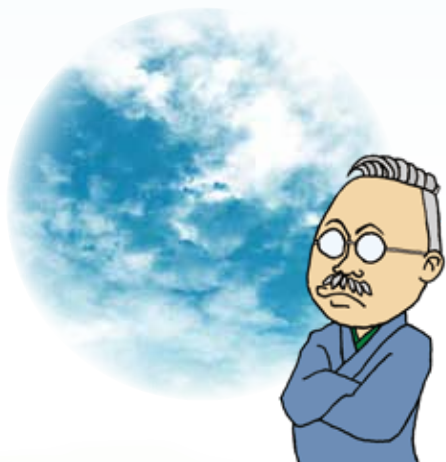
文明は草木がたいへん好きでした。庭にたくさん植えていましたが、最も好きだったのが橙の木とされています。

橙は年の違う実が同時に成ることから、その名「代々」が付けられたそうです。

91歳で、妻テル子に先立たれた時の短歌です。

死とは、終りなき時間の世界に入っていくことである。とすれば、いま先立とうとしている妻と、あと数年で同じように死ぬであろう私と、そのつかの間の順序の後先に、いったいどれほどの違いがあるのか。そう思いつつも、妻と自分のそのわずかな「後前」の違いが私を悲しませるのである。

文明は百歳まで長生きしましたが、それだけにたくさんの人に先立たれ、その死をいたむ短歌をたくさんよまざるをえませんでした。



終りなき時に入らむに束の間の
 後前ありや有りてかなしむ
 あとさき

文明の短歌は、心情を表す言葉がほとんど使われないので、分かりにくい面もありますが、「美しい」、「なつかしい」などという言葉で簡単にすませてしまう短歌よりも、現実が的確に表現され、そこに深い心情が込められていることが分かります。

ぜひ文明の短歌をたくさん読んでみて、学校で勉強したほかの短歌と比較してみてください。

④ 記念文学館

—文明の作品と生涯を紹介する—

群馬県は、土屋文明の業績を記念し、文学に対する県民の理解を深め、教育、学術及び文化の発展に寄与することを目的として、群馬県立土屋文明記念文学館を設置しました。個人名が



土屋文明記念文学館

付けられた都道府県立の文学館は土屋文明記念文学館だけです。文明の生家に近く、榛名山を望む「上毛野はにわの里公園」の中に、平成8（1996）年7月11日に開館しました。

公園内には、「青き上に榛名を永久の幻に出でて帰らぬ我のみにあらし」（歌集とは異なる表記になっています）の歌碑もあります。

常設展示室では、「土屋文明—その作品と生涯—」というテーマで、文明の多彩な短歌と百年の生涯を紹介しています。そのほか、『新古今和歌集』の写本など短歌関係の貴重な資料もたくさん展示し、万葉集時代から近代まで36人の歌人の代表歌を人形で紹介しています。

企画展示室では、季節ごとに年間3回程度、テーマを決めてさまざまな文学を紹介する企画展を開催しています。

さらに、土屋文明記念文学講座や、現代の代表的な歌人を学校に派遣する事業「歌人が学校に！」なども実施しています。

文学館の周囲には、複数の古墳があり、古代人も暮らしたのどかな自然が残されています。近くには、かみつけの里博物館や日本絹の里もあり、ゆっくりと楽しめるので、ぜひお出かけください。

土屋文明 略年譜

- 明治 23 年 / 1890 0 歳 誕生
- 明治 30 年 / 1897 7 歳 上郊尋常小学校（現・高崎市立上郊小学校）入学
- 明治 37 年 / 1904 14 歳 高崎中学校（現・群馬県立高崎高等学校）入学
- 明治 42 年 / 1909 19 歳 上京、第一高等学校入学
- 大正 2 年 / 1913 23 歳 東京帝国大学（現・東京大学）入学（大正 5 年卒業）
- 大正 7 年 / 1918 28 歳 塚越テル子と結婚、長野県教員となる
- 大正 13 年 / 1924 34 歳 帰京、大学教員となる
- 大正 14 年 / 1925 35 歳 第 1 歌集『ふゆくさ』発表
（以後、全 13 歌集を発表）
- 昭和 5 年 / 1930 40 歳 『アララギ』編集発行人就任
（昭和 27 年辞任）
- 昭和 19 年 / 1944 54 歳 陸軍省嘱託として中国を視察
- 昭和 20 年 / 1945 55 歳 群馬県吾妻郡原町川戸（現・東吾妻町）に
疎開（昭和 26 年まで）
- 昭和 22 年 / 1947 57 歳 名古屋での講演で「第二芸術論」を否定
- 昭和 28 年 / 1953 63 歳 『万葉集私注』により日本芸術院賞受賞
宮中歌会始選者となる
- 昭和 61 年 / 1986 96 歳 文化勲章受章
- 平成 2 年 / 1990 100 歳 死去

発行：令和 6（2024）年 3 月
執筆：群馬県立土屋文明記念文学館 特別館長 小笠原祐治
編集・発行：群馬県立土屋文明記念文学館

〒370-3533

群馬県高崎市保渡田町 2000 電話 027-373-7721

印刷：上武印刷株式会社



※無断転載、複製を禁じます